



Eld: Kou MUKAI

2-12-2, ASAHIMACHI, ABENO, OSAKA, JAPANIO

10 Jun, '80 No. 238



▼この号は、Ezans Endymionに出している英文誌「MOM」の5月号に掲載する80年代日本の特徴的状況についての特稿の小文章の下書きとして、かくもの。4月中旬に出すつもりが、電気料金問題などで格別忙しくなり、とうとう6月に。それも、寸暇をおしんで、今夜中にかき終えようと、すこぶる素朴的な走りかきで尻切れた本となった。...ではどうするか、ではなく、そのような状況に對するカクゴ?というかへ見究めが必要だというのが、ぼくのこれをかいた趣旨である。

▼日本読書新聞、6月7日号に「大並哲作」文学作家論の書評をかいた。短いのだが、苦勞しただけに多少はよんでおきたい内容と、自ら待っている。興味ある方はよんで下さい。

▼詩誌「コスモス」29号にも、詩一篇をのせた。

6月7日

向井 隆



待ちがまそと... ぼくは、ぼくの日を絶好のキヤンペイトン

八〇年代になつたからといって、急に何か愛されるわけでも、新しい何かはほじまるわけではない。

だが、たゞひとつ確実に、一九八〇年代中頃、すくなくとも八〇年代中におこることがある。それは、まちがいはなく、昭和天皇の時代が終る、ということだ。ヒロヒトが死ぬ。...

その明白な予見のもとに、いま日本の権力上層がうごかす政治は、すでに眼にもみえるかたちで、激流のようにはげしく流れ出している。ぼくらがついとうかかと気がつかずにいるうちに... あえてその流れを名付けるならば、へ天白皇制国家の再生である。

そして八〇年代に入つていまの日本を特徴づける、まず何よりもカエのことは、天皇ヒロヒトの死を待ちがまそとている人たちが、ヒトの権力者側の一さまびまなおもわくなく、その待機の様子がつくり出すものにあらわれるへ状況で、と、なわねばならない。

①

まずそのひとつのあらわれを、卑近なぼくの最近の出来ごとを例をとってみよう。(これはウリニュースでも見たものせたので、ごく簡単にかく) ことこの2月21日の朝、入口の戸をあけると、男の影が、さ、と電柱の向う側にかくれた気がした。あれ、と見まわすと、下から昇ってくる石段の中ほどに顔だけ出して、のぞいている男がいる。注意して横丁を廻ると、30メートルほど先きの、ちよつとした空地に、見なれない車が停つていて、運転台に、男が二人、それぞれ、ちよつとぼくがパンを買いに行くにも尾行つき、ミ



くから五人、前後左右で連繋をとりあつて、人影がちらちらする。夜、ぼくが寝ているときは、横丁の車のなかに泊つている。どうやら、五人一組のグループが三つか四つ、交替で見張り尾行がついた。が、一体、なぜなのか、さっぱり判らなかつた。こんな何日も泊り込みで大がかりな張り込みは、いままでに

はじめである。ところから3月3日、午後、とつぜん車も男たちも、かき消すやうになつて、はじめ、その理由がわかつた。

それは... 丁度そのころ、皇太子の長男ヒロノミヤ(ヒロヒトの孫)が20才になつて、2月23日東京で成年式の儀式が行われた。そして数日間、約千里前の風俗と形式による行若がついて、三月一日には、大阪から約二〇〇キロ離れた八咫神宮へ(天皇家の祖先を神として祀つてある)に報告とお礼の参拝、三月二日は大阪から約五〇キロの奈良へ橿原神宮へ(初代神武天皇を神として祀つてある)へ、そして三月三日午前中には京都へ伏見桃山陵へ(ヒロヒトの祖父、明仁天皇の墓)に参拝して、その午後、東京へと列車で帰る、ということがあったのである。

つまり、いま日本の法律では何の意味も立場もない一人の若者を、たゞ天皇家の一族ということで、その旅行中の安全を守り、一方で、天皇制に對する批判などをさだめやらかしている人々の不穏なうごきを予防し、威圧するために、日本の警察はその十日以上も前から、大警備陣を、いよいよ本格的に、おたりかまわぬ公使さで布いたのである。(戦前、天皇一族が旅行すると、社会主義者たちは理由もなくへ予防検束)された。その現代版というほかない)

ぼくへの十三日間、延六、七十人を動員した張り込みと尾行が、ヒロノミヤの帰京と共に解除されたということ、そして、4月29日、天皇誕生日の前夜も(すくなくとも)規模は小さかつたが、同様のことが起つたということとあわせて、天皇一族に關する、一年前と格段に数つてきた警察の動きは、一体、何を意味するものだろうか。

②

ヒロヒトはこの4月29日で79才になつた。いつ死を迎えてもふしぎではない老令である。35年前の敗戦、アメリカ軍の占領と支配を通過して、象徴天皇制と呼ばれる日本の天皇の存在は、戦前と比べてきわめて稀世なものとなつた。

天皇ヒロヒトの死は、そのような天皇制を改めて検討し、断絶へと一歩すすめる機会として、反体制側にとつて絶好のキヤンペイトンとするのが当然のことだろう。そして、そのことは又、天皇制を擁護したいとする人々、危機感をもたらすことも明らかである。

ところが、天皇の死についての危機や、その死を契機におこる危機の意識は、いまや日本中のどこを見まわしても、体制側には、全くといってよいほどにない。むしろ、天皇の死を待ちうけ、着々とその時、...



準備しているのである。

すでに、ヒロヒトの死後、たゞちに新天皇をどのような御林の時代とするか、のために、「元号法制化」が国会で通過し、その第一歩はつくられた。

靖国神社法案。有事立法の戒厳令法。既成事実化した白根隊の正式軍隊としての公的認定。そのための憲法改正や徴兵制の声。国歌「君が代」の復活。国旗「日の丸」掲揚の強制化。兵卒産業の公然化。……といったことが、さまざまなかたちで、めらめらしている。

③ Xデーの意味



ヒロヒトの死は、昭和天皇のいまわしい記憶の過去を一幕するだろう。ヒロヒトが生きていたかぎり、ひとびとは、ことにふれて、天皇制が昭和史の中で果たした意味、とくに天皇の戦争責任とその位置づけを想ひ起させるをえない。が、その死は、「死者のめい福をいぬる」「死者をミチウたない」という心情と習俗によつて、ヒロヒトに任位、事績、美徳、れた部分のみがとりあげられ、讃えられるために回顧されることになる。

もし、そのようなヒロヒト回顧に同調せず、むしろ天皇が犯した罪業のかずかずをえあげて、天皇制の存否を問うキヤンとプーンを起す人々があつたとしても、その時は、ほとんどの受け容れられないだろう。「死者の静穏を死しをみだす行為として市民社会から非難されるだけ」でなく、「一それい教派立して、それこそ権力のおもろい社会からの隔離」が進むだけである。放つておいても、自然の成行きとして、このようになる。とすれば、それを最大のキヤンとスところと。曰く、あゝまいたごまかしてきたへ天皇制に、はつきりとした背骨を入れよう。と権力者がたがたるるのは当然のことである。



過去の、明治、大正天皇の死は、なうまでなく、その死を悔み、事蹟をたいて、高揚した国民感情を統合する絶好と機会となり、天皇制を一その強化するものとして、最大の効力を發揮するものであつた。その記憶と経験は、なお支配者たちにつよくのこつて、いま何よりもマスコミ対策としてとられていく。

④

大正天皇が死んだとき、天皇キヤンペンに最大の役割を任じたのは、新聞。そして放送がはじまつたばかりのラジオだけだつた。が、こゝでは、テレビをキヤンに、新聞・週刊誌がある。こゝではそれはどうなるか。大正天皇の際、1901年10月天皇の病状が悪化、12月15日には重態となつた。新聞は10月以降、毎日キヤン一面は、天皇の病状、容態の起伏を伝える記事で埋められ、さらに日に何度も号外が出た。病状悪化と共に、紙面の半分以上は、天皇一色になり、体温・脈博・呼吸の劣化まで、刻々報道した。

12月の日早報、天皇の死と共に、悲痛を表して銀行、証券取引所、魚市場、映画館、劇場、カフェ、ダンスホールなど、とくに娯楽、演芸、遊園に閉鎖するところは自衛を命ぜられて、一せいに閉鎖。また一般家庭でも、レコードや樂器演奏は、いわゆる敬虔禁曲の類を一つしむことが、警察から布令された。もち

ろく新年の祝い事など一切なし……。

このようなことを参考にして、すでに現在テレビ各局のXデーに ついての準備は「業界紙」放送「ポルト」によると一次のように入っている。

- ① 各局では、それぞれ例之「昭和史班」などの名による特別プロジェクトチームができていく。今迄にとつた無数のフィルム・VTRが集められ、編集まで終つて、いつでも上映できるまでになつたのが何本もある。
 - ② 天皇が御死の場合と、重態から死までのケースにわけ、プログラムをつくつていく。
 - ③ 重態の発表あれば、巨額に、ドラマ、漫画、バラエティ、ショー、お笑いもの、スポーツ放送など娯楽的なもの、及びコミニヤルは中止。社長が陣頭指揮の番組対策本部長となる。
 - ④ 御死の場合、レギュラー番組、CMなど全部、ニエースを除いて中止して、天皇に南する特別番組をくむ。キ一日は天皇の公的生活を中心の回顧、キ二日は私的生活について、キ三日は、各関係者関係者の追悼とつづつた。
- それが天皇の葬儀埋葬の四十三日肉つき、その後、服装の約一ヶ年半にわたつて、天皇遺体のプログラムが放送される。

新聞、週刊誌、雑誌もまたそれと大同小異で、すでにベテラン宮内庁記者などを囑託にした、社長直轄班などによつて、特別記者づくりがすめられ、出版社も、昭和天皇史とか、秘録Xとか天皇御録といった企画が完了している。

そして、そのあとにすぐ引続く、現皇太子即位の数カ月に及ぶ儀式。京都御所での即位式。伊勢、橿原、伏見、桃山への報告旅行。民間の祝賀行事の数々……をたると、マスコミを始めとする、すべてのうごきに対する、天皇制的管理体系が見事につくり出されるわけである。そして、それをより一層、完璧にするのは、天皇の葬儀と、新天皇の即位に際して、世間各面から来る高位高官の人たちを守るためと称して、先きの東京サミット警備に数倍する、戒厳令体制と、過激派狩りの名のもとに曰く不審な言動でマークした者の一掃的な弾圧である。たいひとつ、彼らの心配は、このような天皇遺けキヤンペンにたいし、市民がどんな反応を示すかである。

⑤



このような、あまりにもはつきり予測できるXデーの事態にたいして左翼、新左翼とよばれる側は、全く立ちおくれ、何ひとつ対策は持ち合せていない。そして遂に、そのままするところとXデーを迎えて狼狽すること必至である。それにしても、その時、マスコミを先頭とする天皇制復権の大キヤンペンには、当然、一部の者から異議、反対、抵抗の動きが起るだろう。その時、つとも懸念することは、それが市民、市民運動の中から起ることである。左翼のうごきには過激派として、容疑に弾圧できる。が市民に対しては、警察が弾圧の前には、一般市民からの親善化工作を必用とする。

つまり、目前のうごき、今年に入つてからの異変が、あつたの報告は、Xデーにむけての警備体制の再行準備である。また、一般市民への、この大正天皇の死をめぐり、何らかの動きも許すことを示唆する、警戒として、親善化工作として出されていくところである。八〇年代日本の今右を何よりも特徴づけるのは、まさにこのような状況の推移だとわらわらしない。